荏利用

及ぶ物にあらず、作るに造作なくして、極めて勝手よき物なり、土地餘計ある所にては、多く作るべし、刈收る事、時分の見合せ肝要なり、若刈時分過れば忽に零落す、葉悉く黄になりて、本なりの子はやこぼれんとする時、朝露に刈取、下に筵を敷、其上につみ置、又上よりも、筵などをおほひ、むして四五日して、葉くさりたる時、ふるひあげ葉を落し、下にむしろをしき、照日に一日二日干てうち取べし、其後又干打事、二三遍にして悉くおち盡べし、唐人は此油にて餅をあげ、又和物のかうばしなどにもすると見えたり、凡五穀三草などの外の作り物には、利潤是に及ぶ物すくなし、土地多き所にては、廣く作るべし、若おほく作りては、内に取込事なり難きゆへ、胡麻の如く外にふきをき、能干たるを見て、筵を敷て打て取べし、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕荏音任　白蘇俗云惠

本綱、荏形狀與紫蘇無異、但面背皆白者卽白蘇、乃荏也、其子可取油、

按荏關東多種蒔、用子搾油爲燈油、又引傘挑燈雨衣等、不黐而能凌雨、又煉代漆、

造法　密陀僧、大　滑石、中　枯礬、少　入油以文火煉用、以燈心寸許、植之不倒爲度、髹物白粉辰砂綠青等和調、其色鮮明、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕荏　エ古名　エゴマ略語　シロジソ　ジウネン仙臺　ジウネアブラ南部

一名菁通雅　白荏正字通

苗葉花實皆紫蘇ニ同クシテ香氣アリ、唯葉ノ色青ク、花ノ色白シ、野圃ニ多ク栽ヘ、子ヲ收メ油ニ搾リ、雨衣雨傘ノ用ニ供シ、チヤンヲ製ス、又子ヲ用テ小鳥ニ飼フ、原野ニ自生ノモノヲ野荏ト云俗ニノエト呼ブ、子小ニシテ香氣殊ニ烈シク、小鳥モ食フコトアタハズ、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料。略○中　荏子七勺、菓餅料